

現代日本の作曲について

徳備 康純

1) 明治から昭和

【歌謡から見る歴史】

1879年～1887年：音楽取調掛の設置

明治維新後の日本の教育システムを開発し、音楽教員の育成。

単純な西洋音楽一辺倒ではなく、洋楽、雅楽、俗楽、清楽(中国由来の音楽)を五線譜に置き換えて教えるという折衷的方法でシステムを作り上げた。

鹿鳴館時代に代表される、西洋一辺倒の時代にあって、日本古来のものは並べて野蛮なものとした時代において、画期的なものだった。

1879年～1882年ルーサー・ホワイトニング・メーソン(MASON, Luther Whiting 1818-1896)を招聘し、システムの基礎を作り、更に1883年よりフランツ・エッケルト(Franz Eckert 1852-1916)をプロイセン王国より招聘し、1887年の東京音楽学校(東京芸術大学の前身)が創設(1887)によって発展的に解消。

→ 小學唱歌集の編纂

1882年4月～1884年4月にかけて出版。

第13番「見わたせば」(現行の「結んで開いて」)、第17番「蝶々」、第18番「うつくしき」(現行の「釣鐘草」)、第20番「蛍」(現行の「蛍の光」)、第35番「霞か雲か」、第53番「あふげば尊し」、第56番「才女」(「アニーローリー」)、第78番「庭の千草」などがおさめられていた。

小學唱歌集の特徴

- ・外国の曲
- ・ペントニック音階が多いこと

→ 日本古来の俗楽(田舎節、都節など)と類似

田舎節 (陽旋法)

都節 (陰旋法)

四七抜き音階(長調) 四七抜き音階(短調)

1

明治時代において、「ピョンコ節」とペントニックが結びついていた。

→ のリズムでできた俗謡風のメロディーをピョンコ節と呼ぶ。

日清戦争の後の高揚感と結びつき、多くがこの節回しで作られた。
→ 「鉄道唱歌」「散歩唱歌」など

言文一致運動と連動し、唱歌も次第に口語で書かれるようになる。

→ 「幼年唱歌」(1900～1903/全10集)、「少年唱歌」(1903年/全8集)
納所弁次郎(1865-1936) → 「桃太郎」「うさぎとかめ」
田村虎蔵(1873-1943) → 「金太郎」「はなさかじじい」「一寸法師」
→ 「幼稚園唱歌」(1901年刊) ピアノ伴奏付き
滝廉太郎(1879-1903) → 「お正月」「鳩ぼっぼ」

1901年の教科書売り込みの汚職事件を契機に、教科書の国定が始まり、唱歌も文部省により編纂されることとなる。

「尋常小学校読本唱歌」(1910)と、学年別に振り分けた「尋常小学唱歌」(1911)におさめられた120曲が所謂「文部省唱歌」である。

→ 「春の小川」「ふるさと」「日の丸」「冬の夜」「冬景色」など

特徴について→

- ・ 西洋の音階を中心に書かれている (部分的にペンタトニックを使用している)
- ・ 全国津々浦々まで広く歌われた (地域性を考慮できないためのミスマッチ)
- ・ 没個性的

【器楽から見る歴史】

1868年イギリス大使館の護衛部隊の一員としてジョン・ウィリアム・フェントン(John William Fenton 1831-1890)が来日。1869～1870横浜にてフェントンが日本人を指導して軍楽隊の基礎を作る。(1880年フェントン離日)

1870年 兵制に関する太政官布告(海軍はイギリス式、陸軍はフランス式の兵式をとるところに決した。

1871年 元薩摩藩軍楽伝習隊員を中心に水兵本部楽隊が設立(楽隊長は中村祐庸(なかむらゆうすけ 1852-1925)があたり、1877年まで退役したフェントンが指導にあたった。

1872年 ラッパ隊と御親兵(近衛兵)隊に所属していた楽隊を中心に「兵学寮教導団楽隊」が組織される(楽隊長は元薩摩藩軍楽伝習隊員の西謙蔵(1844-1924)。指導に第二次フランス軍事顧問の一員であったグスターヴ・シャルル・ダグロン(1845-1898)があたる。

1879年フランツ・エッケルト、海軍軍楽隊講師として来日。

1883年鹿鳴館開館。奏楽を軍楽隊のメンバーが担当。

1884年第三次フランス軍事顧問の一員としてシャルル・ルルー(Charles Edouard Gabriel Leroux 1851-1926)来日し、陸軍軍楽隊の指導にあたる。(～1889年)

→ フェントンやダグロンは所謂トレーナーであったが、エッケルト、ルルーは音楽家として音楽理論を学んだ専門家であった。

- 鹿鳴館において、当時作られたばかりのヨハン・シュトラウス二世の「美しき青きドナウ」などのワルツ、ポルカなどとともに、吹奏楽編曲ではあったが、数々のヨーロッパの古典作品が演奏された。
- 同時に、軍楽隊が日本の各地に出張演奏を行い、西洋音楽を浸透させていった。
- これにより、いくつもの市中音楽隊が結成され、市民の間でも「市中音楽会」「東洋音楽会」と称して、音楽が聞かれるようになっていった。
- 軍楽隊の特に技量の優秀な者は音楽取調係(後には東京音楽学校)にて専門教育を受けることができた。

1905年 日比谷音楽堂において、軍楽隊の定期演奏会が開催されるようになる。

- 海軍においては、弦の練習などもしていたが、後に中止。
- 大阪市音楽隊、東京フィルハーモニー交響楽団などはこの軍楽隊から発展して創設された。
- 軍楽隊において、初期の器楽創作も試みられる。

古矢弘政 (1854-1923) (ダグロンにトランペットを学び、1887年からパリ音楽院に7年間留学)

永井建子(ながいけんし)(1866-1940) 陸軍軍楽隊第6代楽長。1903~05フランス留学。

瀬戸口藤吉 (1868-1941) エッケルトに師事した後、海軍楽長(軍楽師)に進む。「軍艦行進曲」が有名。

天才、滝 廉太郎(1879-1903)の登場と早世。

1894年東京音楽学校に入学。1898年研究科へ進み、1901年ライプツィヒ音楽院に留学するも、結核を患い帰国し、わずか23才で早世する。

次の楽譜は瀧 廉太郎のピアノ独奏曲「憾み」の冒頭部分。

The image shows a musical score for the beginning of the piano solo '憾み' (Kanami) by Rikudo Takino. The score is in 3/4 time and begins with the tempo marking 'Allegro marcato'. It features a melody in the right hand and a bass line in the left hand, with dynamic markings like 'mf' and '8va'.

【パイオニアたち 第1世代】

・ 山田耕筰 (1886-1965)

歌における独自のセオリーの確立。

→ 一音一語主義

→ 日本語のイントネーションを基本にした付曲

→ 劇的表現における平面的になりやすい欠点を持つ

歌劇創成に尽力

→ 1920年日本楽劇協会の設立と、ワーグナーの「タンホイザー」、ドビュッシーの「放蕩息子」の上演。

→ 「墮ちたる天女」(1912)、「あやめ」(1931)、「夜明け(黒船)」(1940)、「香妃」(1947/pf譜のみ)の作曲と上演。

オーケストラの創設と作曲

→ 岩崎小弥太の援助により1914年、東京フィルハーモニー会を創設。

山田耕筰作曲交響曲「かちどきと平和」初演。1916年解散。

→ 1925年、近衛秀麿とともに日本交響楽協会の創設。(後のNHK交響楽団の前身のひとつ)

伝統音楽と西洋音楽の融和

→ 長唄交響曲「鶴亀」(1934)

・ 信時 潔 (1887-1965)

歌曲、合唱作品を創作の中心として活躍

→ 交声曲「海道東征」(1940/紀元2600年奉祝曲として作曲)

→ 歌曲集「沙羅」(1936)

教育者

→ 東京音楽学校本科作曲部の創設に尽力し、1932年その教授に就任。

・ 近衛秀麿 (1898-1973)

五撰家筆頭の家柄で、また皇室内で雅楽を統括する家柄

1915年より、留学から帰国した山田耕筰に学び、瀬戸口藤吉の代理でアマチュア・オーケストラを指揮してデビュー。

1923年ドイツ留学。

帰国後、オーケストラ運動に尽力。

→ 1925年、山田耕筰とともに日本交響楽協会の創設。翌年、分裂し、新交響楽団が設立。これが今日のNHK交響楽団の前身となったもので、1925年のラジオ放送開始直後のJOAK(日本放送協会)と契約し、定期演奏会などを指揮する。

伝統音楽と西洋音楽の融和

→ 雅楽「越天楽」のオーケストラ編曲

【パイオニアたち 第2世代】

- 箕作秋吉 (1895-1971)

東京帝国大学（現東京大学）工学部卒業後、ドイツに留学。ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム研究所で物理化学を研究。
在欧中、ゲオルク・シューマンに和声法を学び、帰国後、池内友次郎やケーニッヒらに作曲を師事。
「日本的和声」を提唱。
花に因んだ三つのピアノ曲 Op.16 (1935)は、日本的からドビュッシーなどの印象派の音楽に近づいている。
- 菅原明朗 (1897-1988)

陸軍軍楽隊長大沼 哲(おおぬまさとる 1889-1944 / ダンディに師事、マンドリンオーケストラなどで活躍した作曲家・指揮者)に師事。
フランス風の作風でドイツ音楽一辺倒の日本に新風を吹き込む。
1930年代にはイタリア近代のピツェッティなどに傾倒。
オネゲルの「ダヴィデ王」の初演(1942)。
清瀬保二などとともに 新興作曲家連盟の設立に関与する。
マンドリン、アコーディオン、ハーモニカなどの作品、多数残す。
- 清瀬保二 (1900-1981)

山田耕筰に一時師事するが、ほぼ独学で作曲を修めた。
日本の伝統的音感へ指向した技巧に頼らない作曲。
皇紀二千六百年の委嘱で「日本舞踊組曲」を作曲。
新興作曲家連盟 (1930)→日本現代作曲家連盟(改称/1935) →新作曲派協会(1946)
- 大木正夫 (1901-1971)

独学で作曲を修めた。
日本の民族楽器の音を西洋の楽器、語法に移植した作風で知られる。
交響組曲「五つのお話」(1934)、夜の思想 (1937) → ワインガルトナー賞
戦後は左派的傾向を強めた。
- 伊藤 昇 (1903-1993)

新交響楽団(現NHK交響楽団)のトロンボーン奏者兼インペク。
エスプリ・ヌーヴォ(新精神)を求めた。
アロイス・ハーバの「四分音階の研究」「ミヨールの多調」「シェーンベルクの無調」などを日本に紹介した。
安西冬衛の詩による「騎兵」(1930)は独唱とトランペットと打楽器という編成。
先鋭的な作品は、昭和はじめのプロレタリア運動などとともに弾圧され、展開されずに終わった。

エノケン、「丹下左膳」などの娯楽映画の音楽も担当したことでも知られる。

・ 諸井三郎 (1903-1977)

東京帝国大学文学部卒業。大学時代からコハンスキなどにピアノを師事。

1927年に音楽団体「スルヤ (Surya)」を結成。

ベートーヴェンに心酔し、1932～1934 ベルリン高等音楽院に留学。

留学中に新古典主義へ。

交響曲第3番(1944)などの傑作を生むが、戦後はあまり活発に活動しなかった。

教育者として、入野義朗、柴田南雄などの優れた門人を輩出した。

・ 橋本國彦 (1904-1949)

東京音楽学校(現東京芸術大学)でヴァイオリンと指揮を学ぶ。

1933年母校の作曲科の教授に就任。

1934～1937 ウィーンへ文部省の命にて留学。エゴン・ヴェレスに師事する。

アメリカ周りで帰国した際、ロスアンゼルスでシェーンベルクに一時師事した。

シリアスな作品から歌謡曲まで幅広いジャンルに作品を残す。

12音主義による作品もいくつか試作している。

「学徒進軍歌」「勝ち抜く僕等少国民」などの軍国歌謡を作曲したりするが、戦後、戦時下での行動の責任をとって母校を辞任。

門下には矢代秋雄、芥川也寸志、團伊玖磨、黛敏郎などがいる。

・ 大澤壽人(1906-1953)

1930年関西学院高等商学部を卒業後、アメリカにわたり、ボストン大学、ニュー・イングランド音楽院にて学ぶ。

1933年、ボストン交響楽団を指揮してデビュー。

1934年、パリにわたり、エコール・ノルマルにてナディア・ブーランジェ、ポール・デュカスなどに師事。

パリにてピアノ協奏曲第2番などを発表し、絶賛される。

1936年帰国後、関西を中心に活躍。

ボストン・ポップス管弦楽団に範をとったセミ・クラシックの楽団(大阪・ラジオシンフォネット)を組織。

宝塚歌劇団などに音楽を提供したりした。

・ 平尾貴四男 (1907-1953)

菅原明朗と同じく大沼哲に師事。

1931年パリに留学し、スコラ・カントゥルムとセザール・フランク音楽院にてフルートと作曲を学ぶ。(1935年帰国)

歌劇なども残しているが、多くは室内楽作品。

フランス近代の技法と日本の旋法の融合させた作風。

- ・ 松平頼則 (1907-2001)

南部地方の民謡に基づくオーケストラ作品「パストラル」がチェレプニン賞第2席に選ばれる。

雅楽と西洋の前衛音楽との融合→盤渉調越天楽による主題と変奏 (1951)
ソプラノと室内オーケストラのための「催馬楽によるメタモルフォーズ」 (1954)
オーケストラのための「フィギュール・ソノール」 (1957)
雅楽の調子（旋法）を十二音技法で再分析する作曲技法の開発
不確定性などの前衛の騎手として活躍
最晩年に至るまで、進化を続けた作曲家。
- ・ 深井史郎 (1907-1959)

ヨーロッパの最新の音楽を積極的に吸収し、作品に取り入れる。
→五つのパロディ (後にパロディ的な四楽章に改作) (1933)
映画音楽や商業音楽にも才能を発揮
→日本テレビの放送終了の「鳩の休日」のBGMなど。
文筆家としても才能を発揮。
「恐るるものへの風刺 ある作曲家の発言」(音楽之友社/1965年刊)
- ・ 貴志康一 (1909-1937)

自費にてジュネーヴ音楽院、ベルリン高等音楽院に留学。
1935年、ベルリン・フィルを指揮して自作をテレフンケンに録音。
帰国後指揮者として活躍。ベートーヴェンの第九を指揮したりする。
日本の伝統的音階と西洋の技法の融合を目指したと思われるが、道半ばにて、若くして亡くなる。
- ・ 尾高尚忠 (1911-1951)

1931年ウィーンに留学。翌年一時帰国して武蔵野音楽学校にて教鞭をとる。
作曲をプリングスハイム(1883-1972 独)、ピアノをレオ・シロタに師事。
1934年、再びウィーンへ留学。
ヨーゼフ・マルクスに作曲を、指揮をワインガルトナーに師事する。
1938年からウィーン交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団などを指揮
1940年に帰国。新交響楽団の指揮者となり、1941年に新交響楽団を指揮して日本デビューする。
指揮者としての過労から、1951年名古屋での公演後に倒れ、早世した。
日本的な音調と、ドイツ的なしつかりとした形式感に貫かれた作風で知られる。
→フルート協奏曲(1948) チェロ協奏曲(1943)、交響詩「みだれ」(1938)、交響曲第一番(1948)など。

・ 早坂文雄 (1914-1955)

苦学して独力で作曲家となる。

1936年、ピアノ曲「夜曲第1番」がチェレプニン楽譜から出版される。

1937年管弦楽作品「古代の舞曲」がワインガルトナー賞を受賞。

1939年東宝映画に音楽監督として入社。「独立作曲協会」に参加。

1940年紀元2600年奉祝管弦楽曲懸賞に「序曲ニ調」が主席入選。

汎東洋主義により、日本的、東洋的美学による作曲を試みた。

左方の舞と右方の舞(1941)で雅楽への接近をはかる。

やがて、こうした東洋的美学を無調の中で表現する独自の世界を確立。

→ 交響組曲「ユーカラ」(1955)

これが、後の作曲家たち(武満 徹、湯浅譲二など)に大きな影響を与えた。

・ 伊福部 昭 (1914-2006)

1935年、大学卒業後、北海道庁地方林課の厚岸森林事務所に勤務。

独学にて作曲を修める。

独特の民族的な表現を確立した、日本を代表する作曲家の一人。

教育者としても、多くの作曲家を輩出した。

1935年パリで行われたチェレプニン賞に「日本狂詩曲」が第1位入選。

1946年、東京芸術大学作曲科講師となり、芥川也寸志、黛 敏郎などを教える。

同じ頃、古典的名著となった「管弦楽法」を著す。

1947年頃から映画音楽に取り組み、映画「ゴジラ」(1954)の音楽を作曲。

・ 戸田邦雄 (1915-2003)

東京帝国大学邦楽部政治学科を卒業後、外務省に入省。(1964年まで勤める)

駐ソ連日本大使館勤務ののち、帰国し、諸井三郎に師事し、ピアノ協奏曲がコンクールに入選している。

1944年にサイゴンに赴任。終戦を当地で迎え、フランス軍により、3年間抑留。

その間にレイボヴィッツの著書「シェーンベルクとその楽派」を手に入れ、日本に持ち帰る。

この本を読み、12音主義によるピアノのための「前奏曲とフーガ」を作曲。

1952年、ト調の交響曲が尾高賞に選ばれる。

この頃から舞台作品などに傾注していく。

これらの作曲家たちの多く(総てと言っても良い)の特徴をまとめると

- ・ それぞれがヨーロッパの音楽を学び、それを吸収しようとし、
- ・ 自国の音楽とそれを融合していくことを目指した
- ・ それぞれの作曲家に後継者は存在せず
- ・ それぞれに学んだ時代、様式の中で自己完結していた

そして、日本の作曲界においては、戦争中の1940年代がピークであった。

2) 戦後作曲界の概観

【戦中から戦後へ 1945-1950】

[この章のタイトルは日本戦後音楽史(上) (平凡社)から引用]

戦争が終わり、価値観が大きく転換し、それまで支配していたアイデンティティーを我々は喪失する。

戦争中には奨励され、頻繁に日本の作品を演奏していた演奏家たちは、その「義務」から解き放たれ、経済の原則でプログラムが組まれるようになる。

お金のかかるオーケストラ作品では、戦後には発表作品の激減が見て取れる。

オーケストラ作品では

- ・尾高尚忠：協奏組曲 (1946)
- ・早坂文雄：ピアノ協奏曲 (1948)
- ・伊福部 昭：ヴァイオリン協奏曲 (1948)
- ・伊福部 昭：バレエ音楽「サロメ」 (1948)
- ・諸井三郎：交響曲第4番 (1951)

中でも伊福部 昭の「サロメ」は当時、一年あまりの間に180回ほども演奏された。しかし、新作は戦前に比べ、激減した。

- ・価値の転換が、GHQの支配の元で、強力に推し進められていった。

GHQによる統制により、映画、音楽、文学など、文化的活動は自由を奪われてしまった。

占領軍はその初期において封建的、武士道的、軍国主義的な一切の価値観を日本から追放しようとしたようで、1945年11月に映画界に対して出されたGHQ民間情報教育部長名義の指令では次のような映画は禁止とする指令があった。

軍国主義を鼓吹するもの、仇討に関するもの、国家主義的なもの、愛国主義ないし排外的なもの、歴史事実を歪曲するもの、人種差別または宗教的差別を是認したもの、封建的忠誠心または生命の軽視を好ましきことまたは名誉あるものとしたもの、直接間接を問わず自殺を是認したもの、婦人に対する圧政または婦人の墮落を取り扱ったり是認したもの、残虐非道暴行を謳歌したもの、民主主義に反するもの、児童搾取を是認したもの、ポツダム宣言または連合軍総司令部の指令に反するもの。

音楽は映画のような検閲による「被害」は少なかったが、1948年映画「日本の漆器」に菅原明朗がつけた音楽で、雅楽風の音楽をGHQの検閲官が何を勘違いしたのか、「雅楽を使っているからには国粹主義者に違いない。この映画を上映禁止にした上で、菅原明朗を今後使ってはならない。」と断じられたのであった。

オーケストラ作品の発表が特に難しくなっていく中で、作曲家たちは室内楽へとシフトしていった。

小編成であっても、個展を開く財力もない作曲家たちは、グループを作って発表の機会を作ろうとし、敗戦後から1955年頃まで、こうしたグループが林立することとなった。

・新声会 (1946～1950)

諸井三郎門下による

柴田南雄、入野義朗、團伊玖麿、三木鶏郎、小野衛(まもる)

1949年に改組。入野、小野、柴田に加えて戸田邦雄

池内友次郎門下の別宮貞雄、また橋本國彦門下の中田喜直、畑中良輔
下総皖一門下の石桁真礼生の八名のグループへ改組。

・新作曲派協会 (1946～1952)

音楽学校出身者がいないグループ

清瀬保二、松平頼則、早坂文雄、萩原敏次、小船幸次郎、渡辺浦人、石田一郎、塚谷晃弘
後に大築邦夫、武満 徹、鈴木博義が加わる。

→ 戦前、チェレプニンに認められた民族的モダニストが中心。

→ 活動は早坂文雄の映画音楽での収入で支えられた。

・地人会 (1948～1955)

平尾貴四男、安部幸明、高田三郎、貴島清彦

・白濤会 (1951～1952)

山本直忠、渡辺浦人、渡辺茂、金井喜久子、小山清茂

・自由作曲家協会 (1951～1958)

萩原敏次、石田一郎、斎藤高順、鏑木貢

・作曲グループの誕生に対する批判

→ 作曲団体がいくつかできて作品発表会を重ねているが、その主な根拠は、個人では経済的に作品発表が困難だから、グループでやろうという便宜主義があるようである。というのは、新作曲派にしても新声会や白濤会その他にしても何らはっきりした会自身の主張というか、個性が感じられない。当のご本人はそれぞれ理屈を持っているのであろうが、第三者には公平に言って烏合の衆としかとれないのである。(「音楽芸術」掲載、「創造精神の欠如」という無署名の記事より)

→ 團伊玖麿、伊福部 昭などの作曲グループからの脱退もしくは非参加。

【戦後世代の台頭 1951-1957】

・実験工房 (1951～1957頃)

作曲家：武満 徹、湯浅譲二、鈴木博義、佐藤慶次郎、福島和夫

演奏家：園田高弘(ピアノ)

詩人：瀧口修造(詩)、秋山邦晴(詩・評論)

美術家：福島秀子(絵画)、北代省三(造型・写真)、山口勝広(造型)、駒井哲郎(版画)、
今井直次(照明)、山崎英夫(技術)

作曲家だけの団体ではなく、画家、詩人、演奏家も加わり、新しい芸術運動を目指したグループ。

シェーンベルクの「ピエロ・リュネール」やメシヤンの「世の終わりのための四重奏曲」の日本初演なども行う。

1956年「ミュージック・コンクレート・電子音楽オーディション」を開催。

→ ミュージック・コンクレート “musique concrète”

テープ音楽の一種。1940年代後半にフランスで、電気技師であったピエール・シェフェール(1910-1955)によってはじめられた。

磁気テープの出現によって可能となったもので、音響・録音技術を使った電子音楽である。

様々な音響(都市の騒音、自然の中の音など)を録音し、それを電子的に加工して、作られたものをミュージック・コンクレートと呼ぶ。

・三人の会 (1954～1960)

團伊玖磨、芥川也寸志、黛 敏郎

設立当初、すでに名声を確立していた三人による活動は、当時、大きな話題となった。黛 敏郎の涅槃交響曲の初演など、数々の話題を提供した。

・山羊の会 (1953～1960頃)

間宮芳生、林 光、外山雄三

結成の際のマニフェストで「日本の国民音楽の創造と発展に役立つあらゆる仕事をやっていきたい」と述べ、民族的なものを指向し、作曲にとどまらず、評論、音楽の啓蒙なども活動の中心に置き、単なる作品の発表にとどまらない活動を目指した。

・深新會 (1955～1959)

池内友次郎、外崎幹二、貴島清彦、別宮貞雄、眞鍋理一郎、藤本秀夫、寺島尚彦
小島治男、内藤孝、湯山 昭、和田則彦、三善 晃、端山貢明、黛 敏郎、原嘉寿子
矢代秋雄、松村禎三、宍戸陸郎、原 博、篠原 真、広瀬量平

伊福部 昭、あるいは戦後しばらくして早世した須賀田儀太郎などのように、グループに入らず、活動している者もあったが、大半はグループに所属しつつ、作品を発表していった。

- ・1952年、尾高賞が設立される。1955年からNHK交響楽団の定期演奏会でその受賞作が演奏されることとなる。
1955年の受賞作は、三善 晃の「協奏的交響曲」。
- ・1958年より、日フィル委嘱シリーズがはじまる。第一回は矢代秋雄の交響曲。

【前衛音楽と日本の伝統音楽 1957-1967】

- ・二十世紀音楽研究所 (1957～1965)

ダルムシュタット、ドナウエッシンゲンの音楽祭をモデルとして作られた。

二〇世紀の音楽は混沌としてその動向が定まらぬとはいえ、音楽家も一般社会人も、未だその真の理解には程遠きものがある。この時に当たり、我らは演奏と研究を通じて二〇世紀音楽の創造と真の理解のための運動を積極的に展開するために、ここに「二〇世紀音楽研究所」を設立するものである。」(二〇世紀音楽研究所設立宣言より)

吉田秀和(所長/音楽評論家)、諸井三郎(作曲)、黛 敏郎(作曲)、柴田南雄(作曲)、森 正(指揮)、岩淵龍太郎(ヴァイオリン) 以上創立メンバー

小林 仁(指揮)、武満 徹(作曲)、 岩城宏之(指揮)、一柳 慧(作曲)、松下真一(作曲)

1957年から1959年、軽井沢で現代音楽祭と講習会を行う。→NHKで放送。
1961年大阪で第4回の現代音楽祭を開催し、ジョン・ケージの音楽を紹介。
第二回からは作曲コンクールを行う。

- ・作曲家集団 (1960～1962)

芥川也寸志、岩城宏之、武満 徹、林 光、松平頼暁、間宮芳生、黛 敏郎、三善 晃、諸井 誠
草月アート・センターの呼びかけに応じて結成

それぞれの立場の相違を超えて、日本の現代音楽を強く押し進め、創造上の問題を提起し、広い行動半径を持ちながら、強力な創作活動を続けていくという、私たちの共通した理念を、草月アート・センターとの提携のもとに実現してゆきたいと考えます。(結成の挨拶)

草月コンテンポラリー・シリーズという個展形式の作品発表会の開催。

- ・日本音楽集団 (1964～)

現在も活発に活動する日本の伝統楽器のグループ。

尺八：村岡実、横山勝也、宮田耕八郎

三味線：杉浦弘和

箏：参郷輝美枝、山内喜美子、山田美喜子

十七絃：宮本幸子

打楽器：田村拓男

指揮：横山千秋

作曲：長沼勝俊、三木 稔、元橋康男

ディレクター：鞍掛昭二(以上創立メンバー)

「私たちの伝統楽器で現代に生きる私たちの音楽を作ろう」と結成。
従来の伝統的な家元制度への反抗
作曲家と演奏家14名で発足し、邦楽器によるオーケストラというユニークな活動を展開してきた。
三木稔の協力により野坂恵子が新たに制作した二十絃箏など新しい楽器の創造による表現世界の拡大も試みられている。
邦楽器が奏でる洋楽 → 邦楽器が奏でる新たな邦楽(「日本の作曲20世紀」より)
現在、六〇名の団員、年間150回の演奏会を世界中で行っている。

日本の伝統楽器による伝統的イディオムを西洋の音楽のシステムに混在させる試み。

→ 1964年、諸井 誠が「竹籟五章」で尺八のための作品を作曲する。
→ 1965年、武満 徹が映画「怪談」(小林正樹監督/仲代達矢、岸恵子他)において、琵琶と電子音による音楽を製作。

→ 不確定性とトーン・クラスターの台頭
・ペンデレツキの「広島犠牲者への哀歌」
・リゲティの「アトモスフェール」

ジョン・ケージによる西洋的な音楽時間の否定によって、ヨーロッパ的な音楽リズムと日本的なものの断絶が克服されていった。

→ 不確定性とトーン・クラスター技法等の1960年代の前衛技法の消化と新たな展開。

【カウンター・カルチャーと現代音楽 1967-1973】

・ヒッピー文化の高まり。
・1969年ウッドストック・ミュージック&アート・フェスティバル
・フォーク・ソング(ピート・シガー、ボブ・ディランなど)
→ 前半はベトナム反戦、安保闘争、学生運動の高まりと安田講堂陥落と分裂。
→ 後半は1970年の大阪万博以後。明治百年。模倣の時代を経て新たな時代の到来。
→ 1973年オイル・ショックにより沈静化
→ 政治的題材の作品
ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ (HENZE, Hans Werner 1926-2012 独)
・オラトリオ「メデューサ号の筏」(1968)(チェ・ゲバラに捧げられた)
・交響曲第6番(1969)(南ベトナム民族解放戦線の歌の引用)
ルイジ・ノーノ (NONO, Luigi 1924-1990 伊)
・森は若々しく生命に満ちている(1966)(南ベトナム民族解放戦線に捧げられた)

現代音楽作曲論 2.1

・力と光の波のように (1971-72) (チリの革命家ルシアノ・クルツに捧げられた)

ジョージ・クラム(CRUMB, George 1929- 米)

・弦楽四重奏曲「ブラック・エンジェルズ」(ベトナム戦争に触発されて書かれた)

ルチアーノ・ベリオ(BERIO, Luciano 1925-2003 伊)

・シンフォニア 第2楽章 おおキング (1967) (キング牧師の名前から母音を抜き出して歌う)

カレル・フサ (HUSA, Karel 1921- チェコ→米)

・プラハ1968年のための音楽 (1969)

コラージュ

ルチアーノ・ベリオ(BERIO, Luciano 1925-2003 伊)

・シンフォニア 第3楽章 (マーラーの交響曲第2番第3楽章をベースにバッハから現代作品まで
様々な作品が引用される)

一柳 慧 (ICHIYANAGI, Toshi (1933- 日本)

・アップ・トゥ・デイト・アプローズ (1968)

・第三の流行 (1968)

・オペラ横尾忠則を歌う (1968)

・東京一九六九 (1969)

ミニマル・ミュージック

テリー・ライリー (RILEY, Terry 1935- 米)

・イン・C (1964)

スティーヴ・ライヒ (REICH, Steve 1936- 米)

・ピアノ・フェーズ (2台のピアノのための) (1967)

・クラッピング・ミュージック "Clapping Music" (1972)

・ドラミング (1970-74)

各種の現代音楽祭の開催

・オーケストラ・スペース 1966～ (武満 徹、一柳 慧の企画・構成)

→ リゲティ、クセナキス、ケージなどの管弦楽作品を若杉弘、小澤征爾などが日本初演

→ 武満 徹 「弧」「エクリプス」、一柳 慧 「ザ・フィールド」などの初演

→ 武満 徹 「ノーヴェンバー・ステップス」の日本初演 (1968)

→ 湯浅譲二 「花鳥風月」 (1968)

トーン・クラスター、ミュージック・コンクレート、空間性、不確定性の推進

・日独現代音楽祭 1967～

→ ドイツから演奏家を招き、シュトックハウゼン、松下真一、入野義朗など作品を紹介。

→ 作曲コンクールの開催 (アカデミズムと一定の距離をおくコンクールとして有名)

・現代の音楽展 1967～

→ 武満 徹 「地平線上のドーリア」

・クロストーク 1967～ (ロジャー・レイノルズ、湯浅譲二、秋山邦晴)

→ テープ音楽やフィルム・ミュージックなど、インターメディアへの指向が顕著

・民音現代作曲音楽祭 1969～1995

→ 日本の作曲家への新作の委嘱による初演。

1970年 大阪EXPOへの収斂

→ EXPOにおける鉄鋼館における数々の企画はその後の音楽シーンに大きな影響を与えた。

→ 「今日の音楽」の企画

→ テリー・ライリーの「in C」の日本初演。

→ 打楽器や電気音の騒音と楽音の境界の消滅

一方で、邦楽器の使用がブームとなる。

→ 武満 徹の「秋庭歌」(1973)

【前衛の終焉 1973-1980】

オイル・ショックとアメリカのベトナム敗戦と撤退。

欧米価値観の相対的没落

ミニマル・ミュージックの広がり

→ スティーヴ・ライヒ：18人の音楽家のための音楽 (1974-76)

・反復の原理の再認識

→ 佐藤聡明：リタニア (1973)

→ 近藤 譲：オリエント・オリエンテーション (1973)

→ 石井眞木：日本太鼓とオーケストラのための「モノプリズム」Op.29 (1976)

・調性の復権

・旋律の復活

これらが、新ロマン主義の扉を開く。

1973年「ミュージック・トゥデイ」の開始～1992年まで20回の演奏会開催。

→ EXPOの鉄鋼館における「今日の音楽」の継承・発展。

→ 武満 徹プロデュース

1976年 パンムジーク・フェスティバル～1984年

→ 日独現代音楽祭を継承して開催。

→ 日本伝統楽器による演奏コンクールの開催

→ 1982年「ジャズと現代音楽、フリー・ジャズ」をテーマに開催。

クロスオーバー(ジャンルの解体と融合)

軽井沢アート・フェスティバルにおける「ニューミュージック・メディア」

第二回は一年において1976年ヤマハ、つま恋エキジビション・ホール。

→ 水野修孝、三枝成彰、坪能克裕、高橋悠治

→ ロック、ジャズなどとのジャンル横断の試み

→ 第三回でのテリー・ライリーによる即興演奏(2:00am～明け方)の演奏。

【ポストモダン状況の中の音楽 1980-1989】

バブル経済が世相を支配した時代。

→サントリー・ホール、オーチャード・ホール、カザルス・ホールなどの開館。

ポストモダン、新ロマン主義の台頭

→ジョージ・クラムのマクロコスモス(1972)が新ロマン主義の始まりとされる

調性の復権と主題性・旋律の復権

→吉松 隆：朱鷺によせる哀歌 (1980)

・多様式主義 “Polystylism” (複数の様式・技法を使うポストモダンの様式)

→アルフレード・シュニッケ(SCHNITTKE, Alfred 1934-1998 露)

→ソフィア・グバイドゥリーナ(GUBAIDULINA, Sofia 1931- 露)

→シアラン・ファレル (FARRELL, Ciarán 1969- アイルランド)

・ティンティナブリの様式

→アルヴォ・ペルト (PÄRT, Arvo 1935- エストニア)

・アンチ前衛の幕開け

→西村 朗、細川俊夫、新実徳英の登場と三枝成彰のラジエーション・ミサの初演。

・1980年より、草津国際音楽祭、霧島国際音楽祭・講習会の開催

→京都賞、中島健蔵音楽賞の開始。

【国際化、グローバル化 1989-2000】

・ベルリンの壁の崩壊、東西冷戦の終焉とグローバル化と多様性。

・秋吉台20世紀音楽セミナー&フェスティバル 1989～

・神戸国際現代音楽祭 1990～

・武生国際音楽祭 1990～ (2001年より細川俊夫氏が音楽監督となり発展)

・コンピューターの普及と高性能化により、音響スペクトルの分析が容易に。

→スペクトル楽派

音響現象を音波として捉え、その倍音をスペクトル解析したり理論的に倍音を合成することによる作曲の方法論をとる作曲家の一群。現在ではフランスの現代音楽の主流である。音響分析や合成には、フランスの電子音響音楽研究施設IRCAMの果たした役割が大きい。

(wikiより引用)

野平一郎、夏田昌和、金子仁美などがこの楽派に属する。

→芥川作曲賞(1990～ /サントリー音楽財団)

→武満徹作曲賞 (1997～)

・ゲームなどの新しいメディアの台頭とモチーフの復権。

→佐村河内守 (1963- 日本)

(東京外国語大学 現代音楽作曲論 講義用資料より)